

瀬戸愛知県館特別プログラム 海上の森シンポジウム

～ 愛知万博の成果を海上の森の未来へ～

日時：平成17年8月20日 午後3時～5時20分

場所：愛知万博瀬戸会場 瀬戸愛知県館「森の劇場」

主催：愛知県

後援：林野庁、瀬戸市、海上の森の会、(財)世界自然保護基金ジャパン、(財)日本自然保護協会、
(財)日本野鳥の会、中日新聞社

プログラム

午後3時 開会

- ・主催者あいさつ 愛知県副知事 長谷川 信義
- ・来賓あいさつ 瀬戸市長 増岡 錦也
- ・シアターの映像
- ・特別講演「森を活かす取り組みについて」 林野庁長官 前田 直登 氏
- ・パネルディスカッション

テーマ：「愛知万博の成果を海上の森の未来へ」

コーディネーター：山根 一真 氏

パネリスト：木村 光伸 氏 柳澤 力 氏 古南 幸弘 氏 マリ クリスティーヌ 氏

午後5時20分 閉会

主催者あいさつ

【愛知県副知事 長谷川 信義】

みなさんこんにちは。大変暑い中、ようこそ、今日は瀬戸会場の愛知県パビリオンにお越しをいただきました。

加えて今日の海上の森シンポジウムご参加いただきまして誠にありがとうございます。

このシンポジウム、今日こうして迎えることができましたのも大変大勢の皆様方のご協力がありまして、無事開催にこぎつけた訳でございます。

まずもって、関係の皆様には厚く御礼を申し上げたいと思います。

さて、この愛知万博も、1500万の入場者もクリアいたしました。残る1ヶ月ちょっとでございますが、ほぼ、このまま行けば、成功裏に終わるだろうということでございますが、そろそろ県民の皆さんのご関心も、博覧会終わった後、この愛知万博の成果をどう次の時代に引き継いでいくか、活かしていくかということの方が関心が高まってくると思っております。

私ども県の方も、そういうことは十分承知しておりまして、その準備に余念の無いところでございます。

今日のシンポジウムの「愛知万博の成果を海上の森の未来へ」というテーマで行ないますこれと

ても、実は、その一環で計画させていただいたものでございます。

海上の森と言えば、先ほどの映像にもございましたように、愛知万博の当初の候補地として世に問うた訳でございますが、ご案内のとおり紆余曲折ございまして現在の形になったわけでございます。

従いまして、私どもは、愛知万博の原点はこの海上の森であると思っております。

その気持ちを今後忘れることがあってはならんということで、十数年の間に我々はその学習をした訳でございます。

で、問題はこれから先でございますが、例えばこの瀬戸パビリオンはですね、最初から予定いたしましたのは、博覧会が終わりますと半分は残しますが半分は仮設でございますので取り壊しをいたします。で、最初から恒久施設として計画いたしました部分を再構築をいたしまして海上の森の保全と活用を将来にわたって県民の皆様と私どもがどうそこで学習し情報発信していくかという拠点整備をしたいと思っております。

今日はこのシンポジウムでも様々なご意見がいただけると思いますが、そういうお知恵もこれからのこの拠点の運営の一助にしたいと思っております。

どうぞ成果の多いシンポジウムであることを期待する訳でございます。

そして、県民の皆様方からもこれからでございますので、様々なお知恵ご意見をいただいて、皆で作って、皆で運営する海上の森の拠点として育てていただければ大変ありがたいと思います。

本日は誠にご苦労さまでございます。ありがとうございました。

来賓あいさつ

【瀬戸市長 増岡 錦也】

みなさんこんにちは。この場でこういう形で皆さんとこういうことを経験するのは初めてでございますが、こうして立ってみますと非常に雰囲気がありまして、今日私は映像を午前中とただ今と2回同じ映像を見ました。でも見る位置によってかなり違うなという感じをいたしました。

いろんな場面場面で、立場立場によって、その問題のとらえ方はいろんな場面があると思えますけども、まさに海上の森の博覧会が決定した平成2年からずっと議論を重ねて、平成9年、モナコで日本がカナダと誘致で決戦投票して堂々と瀬戸市の海上の森で開催するというのを忘れもしない9月に決定いたしました。

以来、平成11年の5月12日、オオタカの営業が確認された、ということでございました。私は市長になって1週間足らず、経験が全く無いときに、いきなり、その問題をテレビの前で、いきなりインタビュー受けまして、私は思わず言ったんです。「オオタカと一緒に博覧会やったらどうですか。」と。

まさに私は、そういう博覧会になったと思います。この海上にいる多くの動植物、多くの生き物と一緒に博覧会ができる、そんな素晴らしい会場に、多くの方の議論をいただいて、収まって参りました。

当時私は、本当に、「瀬戸会場残るかなあ。」「ぎりぎりのところでどうかなあ。」でも、多くの方々の議論で、多くの市民の方の支えで立派に残していただきました。

まさに、この博覧会が瀬戸会場で出来たいろんな議論、そして、今日進めているその成果、理解、そうしたものをこれから、愛知万博の成果としてお互いの森の未来に続けていければと私は思います。

この海上の森は、愛知県が100年前、当時日本で3大荒地がありました。岡山県と愛知県とも一つは忘れましたが、3つが日本で3大荒地でした。それを県が治山の中で一生懸命整備し、そして50年で一応きれいな森になりました。

でも戦争という大きな経験の中でそこは農地に変わり、また、食燃料のための伐採が行なわれ荒地になりました。それを戦後、まさに愛知県の治山の歴史の中で2度3度繰り返されて、今日の森ができておる訳でございます。

こうした多くの多くの経験、多くの多くの研究を経ながら、こうした森の再生、森の仕組みを日本全国、世界に広げていかなければならないと思います。

日本にはもっと荒れた森がたくさん私はあると思います。人の手が入らずに大きな大きな大木、巨樹が今立ち枯れのような状態がたくさんあると思うんです。そうしたものを我々海上で得た市民と一緒にしてお互いに守っていかうという考え方をまさに全国に広げていく、これが私は海上の博覧会の成果だと思いますので、これから、お互いに里山で住んで、里山の生活を大切に、そして、都市近郊の失われた緑を大切に、そして、大きくは日本の森、世界の森をお互いに守っていく、そして、森の恩恵の中で人間が生活していく、そうしたことをきっちりと我々は考えなければいけないと思います。

是非今日の成果が、シンポジウムの成果が立派にお互いの心に刻み、継承されることを表明いたします。ありがとうございました。

特別講演

【林野庁長官 前田 直登 氏】

ご紹介いただきました林野庁長官の前田でございます。この「愛・地球博」という素晴らしいステージの中で「海上の森シンポジウム」が開催され、このような場で講演できることを大変光栄に存じます。

これから約30分ほど時間をいただきまして、世界の森林、また、地球温暖化問題、それから、日本の森林、林業の現状を踏まえまして、私たちが森を活かすためにどのような取り組みができるのか、紹介させていただきたいというように思います。

森林は人や動物が生きていくことができる豊かな地球を作ってきました。しかし、産業が発達し、都市の開発が進むにつれて、森林の減少が進んできました。

また、石油などの化石燃料を使用しますと、空气中に二酸化炭素を排出いたします。この二酸化炭素は地球の熱を逃さない働きをするために、排出する量が吸収する量を上回っている現在、地球では温暖化が進行しております。

さて、世界の森林はどうなっているでしょう。西暦2000年、世界の森林面積は38億7千万ヘクタールと、数字で言うと途方もなく大きいのですが、実は陸地面積の約3割を占めているに過ぎません。この世界地図で色が付いている部分が森林ですが、随分少ない感じがいたします。

なお、この森林の55%は開発途上地域に分布していますが、世界の人口の78%は開発途上地域に居住していることから、開発途上地域の1人当たりの森林面積は、先進地域の約3分の1に当たる0.45ヘクタールというような状況になっております。

近年の森林面積の変化を見てみますと、1990年から2000年までの10年間で世界全体で9400万ヘクタールの森林が減少したと推計されております。これは日本の国土面積の実に2.5倍にも当たります。

これを地域別に見ますと、熱帯林を中心として、アフリカと南米の森林面積の減少が大きく、この2地域で世界の森林減少面積の96%を占めています。

このグラフでは、0%から下に伸びている部分が減少を表し、上に伸びている部分が増加を表します。アジアを見ますと天然林の減少は大きいものの、中国とインドを中心に人工林の増加が顕著であるために、森林全体の減少面積は小さくなっています。

このように、森林の減少は、開発途上地域の熱帯林を中心に進行しておりまして、洪水、干ばつ、あるいは燃料材不足、こういった問題だけではなくて、地球温暖化や砂漠化など、地球的規模の環境問題を引き起こしております。

では、この地球温暖化を防止するためには、どうしたら良いのでしょうか。それには、二酸化炭素の排出を減らすと同時に、二酸化炭素を吸収する森林を育てることが重要です。

次に、今、日本の森林と林業はどのような状況なのかを見てみましょう。日本は、国土の約70%にあたります2500万ヘクタールが森林で、世界でも有数の森林国です。この2500万ヘクタールの森林のうち、人の手により植えられた森林、人工林が約40%を占めております。

さらに、このうち、まだまだ手入れが必要な、植林してから45年生以下の森林、これが80%もあります。ここ「愛・地球博」には「サツキとメイの家」がありますが、映画「となりのトトロ」に出てくる森のように、豊かな森林になるためには、まだまだ年月が必要です。

このように、日本には手入れが必要な森林が、沢山あるのですが、今、その手入れをする人、林業労働者が減少し続けています。また、単に数が減少しているだけでなく、日本が高齢化社会へと移行している中で、林業労働者の高齢化が進行しまして、65歳以上の方の比率は25%にも上ります。日本全体で見た比率は17%ですので、随分と高くなっております。このグラフでは右に向かって下がっているのが労働者数、逆に右に向かって上がっているのが65歳以上の高齢者の比率です。

それでは、林業活動により、持続的に生産される資源である木材をめぐる状況はどうなっているのかを見てみましょう。このグラフを見ますと、国産材を表す緑の部分が減ってきておりまして、輸入材を表します青の部分が大きく増えております。

日本で生産される木材、国産材ですが、新しい住宅の着工戸数が伸び悩んだこと、製材品輸入を中心とする外材輸入の増加などから、需要量が減少しております。この結果、グラフの赤い線で表されております木材自給率は、平成15年には約18%まで落ち込んでおります。また、木材の価格は、昭和55年をピークに大幅に低下しています。ここでは、赤い線で表されているスギの立木価格を見てみます。立木価格というのは、木が山に生えている状態で販売した時の価格です。昭和55年は1立方メートル当たり約2万2千円でした。これが平成16年には昭和55年の約2割の約4千円しかありません。

一方、青い線は木材を伐り出すときに必要な労賃を表したグラフです。こちらは増加の一途をたどっております。この結果、林業の採算性は極端に悪化いたしております。

かつては、薪を採ったり、炭を焼いたり、あるいは、落ち葉を肥料として活用してきた、そういった里山も、石油などのエネルギー革命によりまして、その価値を失い、人の手が入らなくなり、荒れてきております。

荒れるというのは、ただ木を伐ったままにして、この絵のようにはげ山のような状態にしておくだけを言うのではありません。手入れがされず、もやしのような林になって、下草も生えない暗い森になったり、あるいは、竹や蔓が入り込んで不健康な状態になったりすることも言います。

私たちの身近にある里山が荒れるということは、森林の様々な働きを妨げるだけでなく、いろんな生き物の生活にも悪影響を及ぼしています。里山の豊かな環境は人が手を入れることにより良好に保たれるものなのです。このような状況を踏まえて、国では、森林の有する多面的機能の持続的発揮、そして、林業の持続的かつ健全な発展と林産物の供給及び利用の確保、これを基本理念といたします、「森林・林業基本法」を平成13年6月に制定いたしました。

また、「森林・林業基本法」を受けまして、その理念と施策の方向を具体的に進めるために、「森林・林業基本計画」を策定いたしました。

この中では、目的に応じた森林整備の方向をわかりやすく示すために森林を、水源のかん養、災害の防止を重視する「水土保持林」、それから、森林生態系の保全や森林空間の適切な利用を重視します「森林と人との共生林」、それと、木材等の生産を重視します「資源の循環利用林」、この3つに区分し、この区分毎の森林の整備・保全の方向を示しております。我が国の森林面積の約3割を占める国有林は、この森林・林業基本法の考え方を踏まえまして、森林の公益的機能の維持増進を旨とする管理経営を進めております。

このような考え方から、原生的な森林生態系からなる自然環境の維持などのために、特に重要な国有林野を「保護林」に設定し、適切な保護・管理に努めております。世界自然遺産として登録されている屋久島や白神山地も、代表的な保護林であります「森林生態系保護地域」として、保護、管理いたしております。また、この7月には、知床が世界自然遺産に登録されたところです。

また、保護林と保護林を結び、野生動物の移動経路となる森林を「緑の回廊」として設定し、野生動植物にやさしい、広がりのある豊かな森林づくりを進めております。

ここからは、地球温暖化対策における森林の役割についてお話していこうと思います。

世界の国々が力を合わせて温室効果ガスの排出を減らすように約束しました京都議定書が1997年、平成9年に採択されました。

この京都議定書では、地球温暖化の要因であります二酸化炭素やメタンなど温室効果ガスの具体的な削減数値目標、あるいはその達成方法を定めております。

日本は、基準年であります1990年、これをベースラインとしまして、排出量を比較して見ますと、6%削減を目標としておりますけれども、1990年以降排出量は増加しているため、目標を達成するには、実際には、2002年の排出量から見ますと、約14%の削減を図らなければならないような状況にあります。

京都議定書では、新たに造成されました森林や一定の人為的な管理を行っている森林、これの二酸化炭素吸収量を削減目標の達成上、カウントできるということになっております。日本では、1

300万炭素トン、1990年の温室効果ガス総排出量の3.9%まで計上することが認められています。

ところで、この京都議定書の趣旨は人為によりまして温室効果ガスの排出を削減しようというものでありまして、森林であることをもってその成長に伴う二酸化炭素の吸収量、これをすべて排出削減量に算入することを認めている訳ではありません。温室効果ガスの吸収源と見なされます森林、これは限られております。では、具体的にどのような森林が「森林吸収源」として認められているのでしょうか。

京都議定書では、森林による二酸化炭素の吸収を促進する手法としまして、「新規の植林」、「再植林」、「森林経営」、この3つの手法が示されております。日本では1990年当時には既に国土の7割が森林でありまして、「新規植林」、あるいは「再植林」の対象となる地域はほとんどありません。そのためにわが国では、これらの3手法のうち「森林経営」によって二酸化炭素の吸収を促進することが重要となっております。

京都議定書上では、植付、下刈、間伐といった必要な森林整備、あるいは管理を行うことが森林経営に当たります。このため、対象となる森林は、1990年以降、人の手により持続的に整備や適切な管理、保全がなされている森林だけが吸収源として認められ、間伐など必要な手入れがなされないで放置された森林は対象外になります。

地球温暖化対策としての森林吸収源対策は温室効果ガス削減約束6%のうちの3分の2に当たります3.9%を占める他にも、次の点からも有効かつ重要な対策となっております。森林吸収源対策のメリットといたしましては、即効性、確実性、持続性といったことが言えます。森林を整備し、保全した分をすぐに吸収量として確実にカウントできますし、森林は成長とともに二酸化炭素を持続的に吸収していくために、経済変動の影響を受けることなくカウントできるという特性を有しております。

しかしながら、森林吸収では、3.9%の確保を目標にしておりますが、現状の森林整備の水準で推移すると、せいぜい2.6%ぐらいにしかならず、目標を大幅に下回るというように見込まれております。このため、森林整備のための財源の確保ということが大きな課題となっております。

ここで、森林が炭素を吸収する能力を見てみましょう。

ざっと計算しますと、樹木の重さの約半分は炭素であると考えられますので、2500万ヘクタールの我が国の森林には、およそ14億トンもの炭素が貯蔵され、さらに、毎年数千万トンの二酸化炭素を吸収していることとなります。吸収する炭素の量はスギの人工林ですと50年間で1ヘクタール当たり約170トン、ブナを主体とします天然林では、1ヘクタール当たり約60トンで、成長の良い針葉樹や、手入れの行き届いた森林、この樹木のほうが、炭素をたくさん吸収します。意外に思われるかもしれませんが、炭素吸収量が多いのは若い年齢のスギやヒノキなどの針葉樹なんです。スギやヒノキの人工林を適切に育成していくことが、まさに地球温暖化対策にとって重要ということになる訳であります。

我が国は、平成14年に我が国の地球温暖化対策を取り纏めました「地球温暖化対策推進大綱」におきまして、政府全体としまして、森林吸収源対策に取り組むことといたしました。これを踏まえ、農林水産省では、「地球温暖化防止森林吸収源10カ年対策」、これを策定いたしました。

「森林吸収源10カ年対策」につきましては、一つには、「健全な森林の整備」、二つ目には、「保

安林等の適切な管理・保全」、そして、「木材・木質バイオマスの利用の促進」、それから「国民参加の森づくり」、この4点を柱としております。また、この10カ年対策によります森林整備・保全を行うことは、「土砂災害の防止」、「国土の保全」ですとか、「洪水の緩和」、あるいは、「水資源の貯留」これの他に、「保健」あるいは「文化、教育、レクリエーションの場」、さらには、「木材生産、生物多様性の保全」など様々な多面的機能の向上にも大きく繋がることになります。

地球の温暖化を防止し、健全な森林の育成を進めていくことは、今、ご説明しましたように、行政や林業の側が頑張ることが重要ですが、私たちにも何か出来ることはあるのでしょうか。ここからは、誰でも取り組むことが出来て、森林を豊かにするだけでなく、私たちの心までも豊かにしてくれる様々な活動についてご紹介したいと思います。

近年、森林ボランティアの活動が活発になってきています。森林ボランティアというのは、都市に住む人を始めとして一般の市民の方々が、里山、あるいは人工林を舞台にして、造林、育林などの森づくりの作業を自発的な意志に基づき行うものであります。ボランティア団体の組織形態は、任意団体が8割、NPO法人が1割程度です。

これらの森林ボランティア団体はどのような目的を持って活動を行っているのかと言うと、このグラフのように「里山などの身近な森林の整備」とか、「森林に関する普及啓発」などが多いようがあります。このような活動を行う団体は、年々増加しておりまして、平成9年から平成15年にかけて約4倍にも達しております。皆様も森林の整備に汗を流してみたいはいかがでしょうか。

ボランティア活動に参加するのは意外と簡単です。ここに示しましたように、自治体の主催、森林ボランティア団体の主催、あるいは森林公園、県民の森、こういったもの主催によります多種多様な形でイベントが催されております。

また、ほとんどの活動が初心者向けなのか経験者向けなのか、専門家による指導はあるのかといった情報も提供しているので、皆さんの経験に合ったイベントを選択されると良いと思います。もちろん自ら始めることもできます。

全国各地で森林での自然体験や林業体験活動が実施されております。主催者は様々で、市町村の役場とか、最近ではNPO団体もいろんな企画をされています。

森林の中でいろいろな体験をすることは、子どもたちだけでなく、大人にとってもすばらしい経験になると思います。「森林体験活動」、私たちはこれをより広い意味を込めまして、また体験活動の経験がここでお話しているようなさらなる具体的な活動に繋がることを目指しまして、「森林環境教育」というように言っていますが、これも多くの場所で経験することができます。特にNPO法人等が運営いたします自然学校では、大人を対象とした日帰りコースから、子供を対象にいたしました一週間以上にわたる合宿を行うコースまで、大変バラエティーに富んだメニューを提供しております。皆さんも是非ここにあるようなホームページにアクセスしてみてください。たくさんの情報を得ることができます。

愛・地球博でも森林環境教育を経験することができます。ここ「瀬戸愛知県館」の展示も素晴らしいのですが、「里の自然学校」、「森の自然学校」では、自然の仕組みの解説者でありますインタープリターの方々の分かりやすい解説と案内によりまして、実際に「愛・地球博」の会場の中で森林体験を楽しむことができます。皆様にも、是非足をお運びいただきたいというように思います。そうすれば、森林を体験することの意味、森林環境教育の効果といったものを体感していただけるの

ではないかと思えます。

森林は健康づくりの場にも利用できます。

森林浴という言葉がありますが、森林はただその中に居るだけで私たちの健康によい影響を与えてくれると言われております。グラフを見ても分かるように、森林へ保健休養としての役割を求める人は年々増加しております。

また、現在、人間の体内の微妙な変化をモニタリングするような技術が飛躍的に進歩したことを背景にいたしまして、このような森林の癒しの効果のメカニズムを科学的に解明するための研究が産官学の協力により設立された「森林セラピー研究会」を中心に取り組まれているところであります。

木を使うことも森林にとってとても大切なことです。森を守るために、森を育て、木材をつくり出してくれる林業を活発にすることが必要で、そのためには、日本で育った木を使うことが大切なんです。木材は、環境と健康を守る材料です。そんな材料を日本人は、かつて上手に使ってきました。木材の性質に合わせて、住宅などの建築用材、建具、あるいは、家具、楽器、木製日曜品、紙、こういった様々な形に変えて使っております。

また、木材は、二酸化炭素を吸収して出来たものでありますから、その中に二酸化炭素を閉じこめております。従って、木材を使っている限り、二酸化炭素が空気中に戻るといふことはありませぬ。街に木の家を沢山建てれば、その街は森林と同じ働きをしているということになります。

間伐は、先ほどお話ししましたように、植林したスギやヒノキ、こういった森林が成長していく過程で、欠かせない作業です。植林した木をそのままにしておきますと、生長につれて木が混み合っ、もやしのようにやせ細った倒れやすい森林になってしまうからです。今、日本の林業は大変厳しい状況にありますが、間伐材の需要が増加して、よく売れるようになれば、間伐の作業も進むと思えます。

この、間伐材の利用促進のために、建材ですとか紙製品への利用、アルミ缶等の代替として利用できるカートカンと呼ばれる紙製の飲料用の缶などの普及に努めております。このようなことから、今はここにあるようないろんな種類の間伐材を使った製品が出てきています。

また、このような製品には「間伐材マーク」、これがついておりますので、見かけたら是非手に取って見て下さい。この画面の右の下の方です。

「具体的に活動するのはちょっと。」と、ためらいがある方にも出来ることがあります。緑の募金です。緑の募金は平成7年に成立した「緑の募金による森林整備等の推進に関する法律」に基づいて、国民に対し募金を働きかけることとしております。毎年1月から5月の期間、それと9月から10月の期間を中心に展開されております。平成16年は約24億円もの募金が寄せられました。緑の募金は森林を整備、保全する貴重なたくさんの活動に活用されておりまして、皆様の募金が森林を育てることに繋がっております。

その他、ネイチャーゲーム、炭焼き、ツリーハウス作りや自然の素材を利用したアート作りなど、森林を自然と文化を体験するための様々な活動の場として使うことが出来ます。

このような森林というフィールドを、ボランティア活動や森林環境教育といったジャンルに限定しない、自由な発想に基づく活動も年々増加しております。また、学校や地域単位で「緑の少年団」、これが結成されていることもお伝えしておかなければなりません。

全国で約4千団体、33万人の子供さんたちが、林業体験、樹木観察、ネイチャーゲームといった学習活動、あるいは、緑の募金活動への参加、さらには、植林、下刈りといった森林ボランティア活動、こういったことを行っております。

以上、いろいろとお話してまいりましたが、ここ、「愛・地球博」では、森林の様々な可能性を私たちに提示してくれています。そして、ここ海上の森は、そのような可能性を実際の取組に移すことができる貴重な場と言えると思います。皆様の想いが、活動が、海上の森を活かし、そしてその取組みが全国に広がって行くことを期待しています。大変長い間ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション

山根

皆さん、今日はようこそお越し下さいました。私、愛知県館総合プロデューサーの山根一真です。このシンポジウム開催は、愛知万博の計画が始まって以来、画期的なできごとです。この場所、瀬戸会場は瀬戸市長や愛知県副知事のお話にありましたように、さまざまな問題があった場所です。

私が長久手愛知県館と瀬戸愛知県館の総合プロデューサーを引き受けたのは2001年10月で、すでに「海上の森」の希少生物を守るために主会場の移転が決まった後のことです。しかしながら、「海上の森」が投げかけてきた問題を無視しては瀬戸愛知県館の出展はできないという思いから、「海上の森」とは何だったのか、私たちはこの森とどう向き合うかを出展テーマとすることにしました。

主会場が移転されたが、ここにパビリオンを作らねばならない以上、徹底した環境保全、希少生物の保護を第一の課題として工事を進めてもうらよう強くお願いをいたしました。そして、たくさんの方たちの努力によって、信じられないような環境重視の工事や出展が実現できました。今日、会場にいらっしゃる愛知県の土木担当の近藤朗さん(現・愛知県河川工事事務所)や岸直樹さん(現・愛知県知立建設事務所)も、そういうエコ工事に情熱をそそぎ続けて下さいました。お二人の仕事は、小学館発行の『週刊ポスト』誌の2001年9月2日号と9月9日号の私の連載対談「メタルカラーの時代」でも登場していただいています。ぜひ、その壮絶な仕事ぶりをお読みいただきたいと思っています。

さて、今日パネラーとしてお集まりいただいた4人をご紹介します。木村さんとは今日、初めてお目にかかりますが、森の横丁のご隠居さん、という感じでしょうか。後ほどそのお立場から伺いたいと思います。柳澤さんはこのパビリオンの設計者で、瀬戸会場と瀬戸愛知県館のエコ工事の中心的な仕事を続けてくれた大変な方です。古南さんは日本野鳥の会を代表して来ていただきました。日本自然保護協会、WWF ジャパン、日本野鳥の会という「環境三団体」の働き働きかけによって、万博の主会場は移転されたわけです。その「環境三団体」がこのシンポジウムの後援、パネラー参加が実現したことは、画期的なことです。マリ・クリスティーヌさんは、世界から万博においでになるVIPにこの万博のメッセージを伝える極めて重要な役割を担っていらっしゃいます。鋭いジャーナリストでもありますので、国際的な視野からお話しいただければと思っています。

万博はあと一か月で閉幕です。万博後に「海上の森」後どうしていけばいいのかは、緊急の課題だと思いますので、その点から木村さんからお願いします。

木村

横丁のご隠居の木村でございます。

私はですね、今日は僕はでいきます。僕は植林されて立派に育った木じゃなくて、雑木林の中にひねこびてやっと手足を伸ばしているような人間ですので、この10数年、博覧会だとか海上だとかいろんな議論があるたびにですね、なるほどなとは思いつつながら、誰が何言っても、「でもね」、「ちょっとね」ということを必ず言おうと思って今日まで来ました。

それが何の因果か、「海上の森の会」というそのひねこびた人たちの集まりを統括する立場になっておりまして、そういう視点で今日はものを申し上げたいと思っております。よろしく願います。

山根

柳澤さんが今抱えている課題は何ですか？

柳澤

この建物の設計者の柳澤と申します。

私も先ほどまで林野庁の長官さんのお話を聞いていて、暑くて暑くてしょうがなかったんですけども、この建物の仮設の部分には空調を使っておりません。このシアターも冷やしてはいるんですが、冷水を風を当てて出しているというだけのことをやっております。

で、やはり温暖化対策ということで、できるだけ設定温度を上げようということが前提で、20分我慢できれば大丈夫という前提でやってたんですが、ちょっと今回のシンポジウムは時間が長くてちょっと想定外だったところもありまして、本当に申し訳ないんですけども、もう少し我慢していただければと思っております。

それと会期後に関してなんですが、あと一カ月終わりましたら工事が始まります。改修設計を今進めているんですけども、その工事が始まって約半年から9カ月ぐらい、この間、また環境に配慮したような工事をしていかななくてはいけないんですが、それに対しての撤去アセスがまだ今始まったばかりということで、恐らく工事が始まるまでに間に合わない。ですので、これは、本工事の時もそうだったんですけども、自分達で考えながらまたやっていかななくてはいけない。そのときまた皆さんに、いろいろお知恵をいただきながら、どうやったら環境に配慮した工事ができるか考えていかなきゃいけない。これは自分たちサイドの問題です。

それともう一点は、我々、箱しか作れませんので、中でどういう風な活動をしていかれるかということ、やはり海上の森の会の皆さん始め、皆さんで考えていっていかなければいけないと思うんです。特に地方博ですとかイベントの跡利用、イベントで残った施設の利用というのはイベントが終わってから考えることが多いので、非常に使いづらい。あるいは箱だけ出来ちゃってどう使おうということになる場合が多いです。そうならないようにまだ1年ほどありますので、皆で一生懸命考えていければと思っております。

山根

建築家は建物の設計をし、工事の指揮をして、建物が竣工したら引き渡して終わりです。となれば万博開幕の3月の25日で、柳澤さんの仕事は終わったはずなんですね。しかし彼は毎日のようにここに来ているほど強い思い入れをしてくれています。柳澤さんがいなかったらこのパビリオン、この瀬戸会場自身、まともにはできなかったでしょう。さて古南さん、今日はよく来てくださいました。まず今のお気持ちから。

古南

はい、古南でございます。鳥の会、野鳥の会と言いますけれども、環境三団体とか言われてですね、何か角ばった言い方をされると、またあいつが小難しいことを言うに違いないと期待されているかもしれませんが、先ほどの冒頭ですね、素晴らしい映像のプログラム、本当に私もすごく気に入っているし、山根さんにあれはすごく感謝しているんです。あの中で「森を残すべきだ」という声があります。」というところ、私たちはそういう人たちと一緒にというか代弁するというか、そういう形で、この愛知万博の初めの頃の計画を少し直してほしいということを言い続けて来たんです。ただ、別に万博に反対してきた訳じゃないんで、万博反対派と言われるとちょっと困っちゃいますけど、せっかく環境万博っていういいテーマを掲げているんだから、いい万博にしましょうよっていう提案をし続けてきたつもりだったんです。

山根さんがお見えになる前に、色々な論議がありました。それでようやく、万博が開会するということで、私たち自身はあんまり万博の展示そのものには残念ながら関わって来てませんでしたけれども、内覧会が開かれた時、まあ、恐る恐るというか、まだ山根さんのことも存じ上げなかったんで。

山根

瀬戸愛知県館にこっそり来た？

古南

こっそりじゃないんですけど、来て見てですね、非常に私はびっくりしたというか、感激しました。最初の映像、海上の森何度か行ったことある人だったら、あれは本物の映像だっていうのが誰でも分かると思うんですね。全部海上の森でお撮りになって、録音も、合成も無しというお話も後で聞いたんですけど、非常にびっくりして。

私たちはそもそも、海上の森そのものを万博に展示するということではできないだろうかという夢のようなことを考えていたんですけど、それが端無くもこの瀬戸愛知県館で実現してるんじゃないかなと思いました。で、やっぱり、環境万博が残すものの中でもこのパビリオンが表しているものとか目指しているものというのは私たちがやってきたことにダイレクトに繋がるんじゃないかなとおこがましくも思いまして、まあ、そんな思いで参りました。

山根

「ポスト万博計画」がまずいことになっていると、また大きな声を出す予定はありますか？

古南

いや。挑発的だなあ。

山根

後ほどじっくり伺います。

マリさん、この万博は本当に「環境の万博」なんですかね。私は「環境時代にふさわしい万博」にすべしと思ってきたんですが、ゲストの大統領や首相など世界各国のVIPはこの万博をどう受け止めていますか？

マリ

広報プロデューサーをやってますマリ クリスティーナです。よろしくお願いします。

私が、今ずっと毎日、広報もさておきながら、海外要人の方々とよくお話をさせていただいて、非常に様々なんです。なぜ様々なかと言いますと、やはり地球っていうのは多様な場所であっているんな国々の抱えている問題点、皆違う訳なんですね。ですから今山根さんに聞かれたことをお話ししますと、恐らく2、3時間ないと全部語りきれないほどの話ですので、最初の自己紹介のところだけで、とりあえずやめさせていただきますが、私自身も2002年から広報プロデューサーという肩書きをいただいた訳なんです。

私も最初は本当に他人事のように、やるのかなあ、やらないのかなあとか、一番最初に誘致したときもプレゼンテーションの時に来ませんかって声かけられたことがあるんです。英語でプレゼンテーションしてほしい、フランス語でもやってほしいと言われてまして、たまたまスケジュールが合わなくて行けなかったんですけれども。それで、このような立場にならせていただいて、私は何を広報するのかということが困ったことだったんです。それなげっかって言うと今山根さんが言われたように「これは環境の万博でしょう。」って言われてしまうと、環境っていうことをどこの括りの中にするかってことだと思っんですね。

やっぱり環境を考えた時に一切触れないことが一番いいことは誰しもが思うことではと思うんですが、絶対触れてはいけない環境と、やはり、だめになってしまっってどうしようもないような環境にいかにお息を吹き返すかということがすごく大事で、それは最先端技術でなければできないこともある訳ですから、両方の右と左の真ん中辺にどうやってすべてを持っていくかっていうことがすごく重要だったと思っんです。

で、万博の中で全部それを表すことは、一つ一つはできると思っんですけれども、全部それに対して答えることができることはないと思っんです。ただ、今回の万博が環境万博とって私は本当に胸を張って言えることは何かと言いますと、博覧会歴史の中で始めて200以上の環境アセスを自ら、自己規制って言うんでしょっうかね、自分たちから作っって、それに対して、100%とは言えなくてもなるべくそれに近い形でちゃんと守っってきたってことが言えるのはこの150年近い万博の歴史の中ですね、初めての万博なんすね。

ですから、ある意味ではこれからの万博に対しての、英語でプレゼンツとて言うか、最初の取っ掛かりを作っってきた博覧会と言えるのであれば、歴史に残る博覧会になるでしよっうと思っんです。

で、私は、いつもこの瀬戸会場が万博のスピリットを持っているんですっていうふうに外国の要人の方に申し上げるんです。

それはなぜかといいますと先ほどの話にありましたように、万博はこの海上の森でスタートした訳で、万博の魂がここにあるって、ここに来ると、リアルタイムに色々な活動をされている方々にお会いすることができ、むしろ彼らから得られるいろんな情報とかこの関わり方、この多様性というのは単なる生物だけではなくて人間の多様性とか民族の多様性とか人々の多様性をすべてここで私たちが体験することができるので、本当の意味の万博がこの瀬戸会場にあるのではないかなあと思います。

ですから、ここで触れてそれで長久手である意味ではちょっとイベント的な形でそしてまして皆様が持っている最先端技術を本当に目の当たりにして体験できる博覧会会場っていうふうに説明しているんです。

そうすると海外の人大変納得してくださいますし、そういう点では海外から来られた方々は日本ってすごいなあっていうふうに言って下さってることは確かですね。木村さん、先ほどお話ありましたけれど、何かモリゾーの模範になってくれたんじゃないかなっていう感じですね。モリゾーに似てますよね。

山根

「多様性」はいい言葉ですね。今の環境時代の原点が、1992年にリオ・デ・ジャネイロで開催された「開発と環境に関するサミット」です。その柱の一つが、「生物多様性条約」でした。この「森の劇場」でご覧いただいている映像の中で、カマキリがバッタを食べるなどの食物連鎖、食ったり食われたりしてる生物たちのシーンが多く出てきます。そういう食物連鎖が揃ってなければ森として成り立たないという思いを込めて撮影したものなんです。希少生物だけを大事にすればいいというものではない、森の多様性を大事にしないといけない、ということをお願いしたかったわけです。

問題はこれからどうするか、です。そこでモリゾー先生にお伺いします。私たちの仕事は9月25日で終わります。私は4年間にわたり「海上の森」の生命を守ることが必死になってやってきましたが9月25日以降は一切、無縁となります。そういう県との契約です。柳澤さんはパピリオンの改築などの仕事が、古南さんは自然を損なうおそれが生じた場合に警告を伝える「圧力団体」として機能されるのかどうか分かりませんが、非常に心配しています。これほど苦労して「海上の森」の素晴らしさを説いてきたんですが、それが継承されていくのかどうか。木村先生に伺いたいんですが。

木村

ええとですね、まああと一カ月ちょっとで終わりますからどうぞ安心して東京へお帰りください、というのが一番簡単な言い方かもしれないんですけど。

山根

「もう東京に帰っていいよ」ということですね。はい、ありがとうございました。

木村

ただね、先ほどからこれは環境の万博だっていう話にどうもぐっと思っちゃってますが、僕は環境の万博だなどとは全然思ってません。これは命の万博。命の万博だからこそですね、戦争のことも平和のことも愛のことも文化のことも民族のことも皆いろんなパビリオンで語れる訳ですよ。これをね、環境という言葉で括っちゃいかんのだとずっと片隅でささやいているんですけど、中々大きな声にならない。

でね、なぜこんなこと言うかという、「さあこれで博覧会が終わったから海上の森で皆で環境のことを考えましょうよ。」と言ったって、誰も集まらないんですよ。ここは環境のことを考える場所ではなくて、結果として海上の森という環境は守られたり壊されたりするかもしれないけれど、そこへ来る人たちは一つの動物や植物や様々な人間も含めてだろうけれど、あるいは、田んぼの活動も含めてかもしれないけれども、そこに生きている命を感じ取るために来られる。あるいは、何も考えずに来て、その命を感じて帰られる。そういう場所だと思うし、これまでもずっとそうだったんです、海上というのは。

で、もしですね、あの海上の地域が博覧会ではなくてどこかのデベロッパーが住宅産業がやって来てですね、開発をすとなったら、恐らく圧力団体の方々も来られないままにですよ、あるいは誰も気が付かないままに、今頃立派な造成地になってですね、家が一杯建ってる。まあ、半分位売れなくて空いてるかも知れないけれども。という所だったと思うんですね。それが何を間違えたか博覧会をやるよと言ったばかりに、これはとばかりに飛びついてきたいろんな人たちがいた訳です。

で、僕はその良し悪しは申しませんが、いろんな人が博覧会って何だろうと考え始めて、そして、博覧会をやる場所としての海上って何だろう。そして、どうも環境だの自然の叡智だのって言葉が一人歩きし始めますと、ますますそういうことをやる場所としてあそこは相応しいのかという疑問が沸々と沸いてくる。

そうなるともうこれは古南さんの出番ですからあとは譲りますけれども、なぜあそこでそういうことがやれるのか、やるのか、あるいはやらなければならないのかということ、きちんと理屈として言わなければならない。そういう状況に追い込まれていったんだろうと思うんですね。

ですから僕は博覧会をあそこでやると言った人には表彰状をあげたいと思う。結果としてそのために海上の森は守られた。だからその結果として守られた海上の森をこれから私たちがどうしていくかっていうことを山根さんは大変ご心配くださっている訳だけれども、これは、もう一回あそこで命を考える場所としてささやかに皆で守っていきましょうということをする以外に多分手は無いらんと思う。

大々的に何かやりましょうとかですね、先ほど林野庁長官がいろんなボランティアの仕方がありますよとおっしゃったけれども、いろんなボランティアの仕方は確かにあるだろうけれども、そういう人たちが自分の思いだけであそこに集まったら海上の森が守られるかといったら、僕はそんなことないと思うんですね。

昔ながらにやっぱりあそこで命を感じ取るような人たちが、細々と、細々としてのは、決してですね、ちっぽけな意味ではなくて極めて持続的な意味も含めてですけども、そこで私たちが生き

続けていくことが海上の森の将来に繋がっていくんだらうなというふうに思います。

ということでとりあえず。

山根

「海上の森」を里山と呼ぶようになっていますが、それは違うのではと私は考えています。そのため、「森の劇場」では、一切、里山という言葉は使わなかったんです。里山とは、生活を維持するための薪炭や材木、食糧を得るバックヤードの森を意味した言葉です。今、「海上の森」に住んでらっしゃる方もありますが、この森を生活の糧として使う昔のようなライフスタイルがあるわけではないですね。となると、昔ながらの里山とは違う里山のあり方を考える必要があるのではと思います。

そこで、古南さん、その里山の概念にも触れながら画像とともに「海上の森」の履歴を説明してください。

古南

堅苦しくならないようにお話ししたいと思いますけれども。海上の森の自然のご紹介っていうのは本当に冒頭の映像プログラムでもう尽きているんで、今さらという話ではありますけれども、私たちのような外部の人間っていうか、地の人風の人という言い方で言えば、私たちは風の間人ですが、そういう立場から見るとですね、いや本当にこれはすごい財産だになっていうことがまず一つ言いたかった。

それから木村先生も指摘されましたけれども、自然の叡智っていう万博をやるのにこれを壊すのは矛盾だっていうのは一番言いたかった。自然の叡智の名の下に価値のある、人間に役に立つかどうかっていうところじゃなくてですね、生き物自身の価値が非常に高い場所を壊していくっていうのやっぱりおかしいんじゃないかと。そういうことが森を残してほしいっていう声を上げた人たちの意見であり、そこに私たちが応援していったということでした。

海上の森は丘陵地ですからなだらかな地形で、ただ懐がこう、襷がたくさんありまして、その中に今生物多様性という言葉がありましたけれども、いろんな生き物が賑わって、それから生き物同士がいろいろ繋がっているということですね。山根さんが言われた万博の多様性っていうのは繋がりがなくても多様なのかも知れないけど、生き物の多様性っていうのは必ず繋がりがあるところがすごく重要だと思います。

もう一つは木村先生も言われましたけれども、人の暮らし、農業と共存していくなかで生れた部分もかなり海上の森では重要だと思っています。次お願いします。

それから海上の森でとても重要なのは、あの530ヘクタール、かなりの広がりを持っているという場所が奇跡的に残されていたということ。それから、行ってみると分かるんですけども水が豊富なんですよね。水脈が豊富。で、あちこちに小さなため池とか湿地とか沢とかが出来ている。

これは、今日もお見えになってますけれども、地質学者の森山昭雄先生が明らかにされたのですが、海上の森はすごく特殊な地形、地質で、小さな湿地が出来ては消え出来ては消えする。そういう所にすごい沢山の生き物が住める。そういうのが特異なことであったということだそうです。こういうことは、今日会場に何人かお見えになってますけれども、海上の森がもう大好きで、生き物

の賑わいが大好きでお通いになった方たちが段々明らかにされていったことです。

土日に行くと、子供たちが本当にあちこちで遊んでいるという姿を見ます。子供も生物多様性の一部ですけれども、そういう非常に親しみやすい自然であったという所ですね。ここに2000戸、6000人という市街地を作って道路を通そうというのが一番最初の計画でした。でまあ、いろいろ紆余曲折はあった訳ですけれども、一番最初に愛知県さんの方で作られたのがこのピンクのところですね、市街地を作って、これ道路を沢山作って、少し後に縮小されましたけれども、今海上の里と言われている部分、それから、今万博やっているのは大体この辺ですけれども、かなり中心部分を開発して真ん中に道路を通すような計画だったと思います。

で、オオタカが存在が出て来ちゃうんですけれども、私もオオタカっていうのは一つの象徴だと思っていて、種の保存法という法律で守られているんですけれども、食物連鎖の象徴みたいな鳥でして、小鳥がいて蛇がいてそれをオオタカが食べるという、生き物の繋がり頂点にいる鳥だった。で、これが出て来た時に、じゃあ、先ほどの様な都市を残すっていう万博にするのではなく、それとも、こういう里山の生き物たちを生かした形が何か出来ないのかということが私たちの主張だったということです。はい、次お願いします。

99年にオオタカが見つかりまして、これは私たちの仲間の村瀬貞彦さんが長年の調査で見つけたものなんですけれども、端無くも象徴的に出て来た。

で、その時改めて、森を残してくださいという声の代弁者としてどういうことを言ったかっていうと、住宅と道路は見直してください。それから国際博覧会の開催に当たって里山の自然そのものを野外展示するよう工夫してくださいということ。三つ目は、海上の森を将来にわたって維持し活用する方策を市民とともに検討してくださいということをお願いしてきました。それで、翌年に愛知万博検討会議という会議がそれこそ市民が参加して検討するという会議として持たれました。で、今日多分会場に、ここに関心の方、直接間接に関心の方がおられると思うんですけれども、多くの人にとってはこれが万博の体験の始まりというか、この辺から私たちにとっての万博が始まったのかなあなんて勝手に思っています。

検討会議の会場に入った時非常にびっくりしたのは、円卓なんですよ。並び順が自然保護派、推進派とかじゃなく、アイウエオ順で、古南がここにいる、この辺に木村先生がいて、と、そういうアイウエオ順で円卓が準備されていた。そういうふうにしたらどうですかって言った覚えはあるんですけど、本当にこういう形でやってくれたというのは、まずすごくびっくりしました。ここから始まったんだなあっていうのは振り返って思います。

もう一つびっくりしたのは、最初にですね、委員長選出っていう、「はいっ。」と立候補した人がいまして、皆さんご存知ですけど、中京女子大の谷岡先生ですけど、それもびっくり。

ここから、いろんな硬直した関係だったところから、柔軟にいろんな意見出し合いながら作っていくということが始まったんだなと思います。

で、いや、環境三団体は自分たちの意見が通って満足でしょうっていう言い方をされることもあるんですけど、私たちも平場に出てって、木村先生たちと直接議論を交わしていくっていうのは、それは非常に新鮮というかある種難しい体験で、いろいろ悩みもしましたし、仲間同士でもいろいろ意見が違ったような所もありましたけれども、ともかくも、いろんな立場の人間が集まって、誰かが一括で決めるんじゃなくて、いろんな立場の人間が現場を見込みながら会議もしながら会場計

画を作っていたと、変えていったということです。

ちなみにこの場所はまさに瀬戸会場の一部なんです。こんな感じだったんですよ。で、その元々の検討会儀が始まった時には、ここは南地区と言っていて、沢の部分も会場にするような話だったのを2ヶ月半位で今の形、今の瀬戸会場の形にしたんですけども、こういう現地の調査なども皆でやりました。お互いの意見はいろいろぶつけあいました。違う意見、立場の人を交えてこうしようねっていうのを合意した。お互いに譲り合う訳ですけども、そういう体験が一つ万博の糧としては重要だったんじゃないかなと。

何かこう議論をしてお互いに譲歩しながら、というのはちょっと格好悪いみたいな感じがするんですけども、でも、そこが一つ新しい体験であったし、教訓であったんじゃないかなという気がしています。

万博後の話として、愛知県さんが、設けた「里山学びと交流の森検討会」がありました。さっきの愛知万博検討会議の後継機関というのが4つ出来たんですけども、その中の一つで県がやってくださったんですけども、海上の森530ヘクタールの中でいろいろな体験ができるようにということは今考えてくださっています。重要なのはこの530ヘクタールを一括で残すっていう決断をしてくださったということと、私たちとしては条例を作ってほしいというふうに言っているんですけども、この何かの確保する決まりごとを作るっていうこと、それからもう一つ大事なのはここ、まさにこの瀬戸愛知県館が拠点施設になること。

そろそろ何かいい愛称が必要だと思っていますけれども、拠点になる所ですね。これは海上の里に市民の皆さんが古民家を移設されたそうで、海上の森の会の方たちがこれを運営されるんですね。そういうような拠点が出来ました。それからやっぱり重要なのは人で、海上の森の会の設立総会に私も参加させていただきましたが、箱を作って魂入れないと駄目なんで、人がどう担っていくかというところが非常に大事なんじゃないかなあというふうに思っています。

山根

ありがとうございました。木村先生によると「環境万博」と言っただけとはいけないとのことですが、あえて私は「環境万博」と言わせていただきますが、今我々が直面している「環境問題」の根源は、「すべての生物が滅びる危機の問題」だと考えています。このパビリオンの出展は「生命の絶滅危惧」がテーマですから、私たちは、「環境万博」イコール、人も含めた「命の万博」だと考えて出展計画を立ててきたということは、お断りしておきます。

マリさん、今の古南さんのお話を伺うと、こういう問題に直面した時に、国や自治体側と市民あるいは環境を考える団体が、対立を超えて望ましい道を見出すことができた、というケースは過去にはとても少なかったのではと思うんですが？

マリ

そうですね。私日本の国民がある意味ではすごく大人になったと思うんですね。なぜかって言いますと、私国連のハビタット人間居住計画の親善大使をやらせていただいています。自然災害とか戦争後の復興支援が活動内容です。その中で一番重要なことは何かといいますとコミュニティー作りなんです。コミュニティー作りするためにはやっぱりお互いの意思、自分達がどういうまちづ

くりをしていきたいかという意見交換をしながら歩み寄れる場所を見つけていく。この方々が皆ステイクホルダーなんですよ。

ですから一つの場所に集まって皆で検討して行って作っていく、作ってきたからこそ大切に、それを大事にしていける訳なんですよ。

ですので、そういう点では、私はこの海上の森がものすごく大事なものの、カタリストになったと思うんです。スターティングポイントとしてこれから地域づくりとかまちづくりとか、やはり、自然環境を保護するためには、環境というのは言葉がない訳ですから、声を出せないでアドボケイトが必要なんですよ。そういうアドボケイトに皆さんがなったということが私はすばらしいことだと思いますし、それに、もちろん私は万博協会側という立場だけではなくて一市民という立場でもある訳です。愛知万博の今回の博覧会協会側にとっても、一緒になってやっていこうという姿勢が両側からあったことが、私はある意味ではこれはエポックメイキングだと思いますし、是非、この模範というか、このケーススタディーを、むしろ木村先生も論文書かれたりいろいろされてますけれども、世界中に広めていくってということがすごく大事だと思うので、私は海上の森は、メガリープしたと思うんです。ある意味では、日本の、そして愛知県の、そして瀬戸の海上の森じゃないんですよ。これは世界の海上の森なんですよ。ですから、そういう点ではニュースにこれだけ載ったことは、やはり皆さんこれからどうしていくかということがすごく大きな課題だと思うんです。

山根

そこまで言っていた方がいいんでしょうかね？

マリ

いや、だって本当にそうですもの。海外から来られた方々は鳥が出たんでしょっていう方もいますから、鳥ではなくてゴスホークっていうとっても大事なオオタカが出ましたっていうふうに収めてます。

山根

「海上の森」と万博計画を巡っては、何とも山のような不幸がありました。今日、こうして古南さんも迎えて「海上の森」の今後を話し合うテーブルにつけて、ホントによかったと思います。

さて柳澤さん、柳澤さんが取り組んできた「海上の森」と万博計画について、ざっと説明をお願いします。

柳澤

これ実はあんまり外に出てないんですがコンペの時の図面です。2001年ですね。

これまだ政府館が来る前位のタイミングでやっています。ただ、これ何で出したかと言うとですね、このコンペに参加するかどうかで非常に悩みました。

もう協会はほとんど撤退しているような瀬戸会場、しかも地雷原みたいな所に入ってくる訳ですけども、で、どうしようか。その時にやっぱり万博の方を向いてはこれは仕事が出来ない訳

で、会期後の施設だから参加するんだと、恒久に残す建物のためにどういう設計が出来るかということから入って来ました。

それで参考にしたのが協会や県さんの資料はほとんど参考にならなくてですね、そちらにいらっしゃる曾我部さん中心に纏められた国営公園構想ですとか、岡山理科大の先生のこの辺の地質の調査データ、森山先生もですけども、いわゆる反対派の方たちが作られていた膨大な資料が滅茶苦茶参考になってそれがベースになってこういったコンペに応募して当選をさせていただいておりますが、その後、谷岡先生のお陰で政府館がここに引っ越して来ちゃいましたのでこの案は没になりました。次お願いします。

これが今の状態。で、上が取っ払われて会期後はこういう形になります。ちょっともっともらしい絵が描いてありますけれども、実際にはこの沢筋がこうちょっとだけあるんですね。それをどうやって守ろうかというということで、骨格が決まっています。次どうぞ。

この辺から波多先生の図面なんかを基にして、ものすごく砕いてますけれども、水脈、地下の岩盤の上の水脈、それから上の水脈を守るような構造で考えたんですが、とっても簡単に書いてありますけれども、先ほどどなたかがおっしゃったようにもうもっと滅茶苦茶な地質なんですね。ボーリングをもう何本打ったか分からないんですが、掘ってみたら褶曲はあるは断層はあるはもうすごいところです。

とてもじゃないけど普通は建物建てれるようなところじゃないんですが、ちょっとこれいろんな意見があるんですが、建物と外構を結ぶような形でメッシュ籠で少しランドスケープを含めて安定化をさせてます。

結果的に瀬戸市のホフマンの森でやられてる工法とすごく似てたんですが多自然型の植栽回復にすごくいいというような工法だったんですけども、一方で攪乱をなくしちゃうのはどうかっていう話もあって、この辺は建築やる以上はちょっと攪乱の方向は難しいかなあと。まあ、安定化させる部分になってます。はい。

それとこれはどうしても話したかったんですが、今の博覧会場はこのあたりです。実際のこれは吉田川の水域圏です。これはもう私の仕事ではなくて先ほど紹介があった県の近藤さんのプロフェッションの部分なんですが、この吉田川の水域を守るのに博覧会場だけでやっていたのでは全然守れない。ですから博覧会以外の業者さんなんかにも呼びかけてここに関係するコミュニティーが実際には出来てます。

いろんな会議をやりました。主に水質調査、水質の調整なんですけど、どの業者からどの濁水、どのアルカリが出たというのがすぐ分かるようなシステムになってまして、これは近藤さんたちが中心にやられた話が今発売されてるポストにすごく詳しく載ってます。はい、次。

この辺が会議の風景ですね。はい、次。

あと貴重種の保護もやったんですけど、そうじゃない。貴重種だけやってもしょうがないんですね。いろんなものをとにかく工事前に一回避難させるというようなことを、これは東部丘陵さんの工事ですね、やっております。はい。

それとコナラばかりが目立ってますが、もっと一杯、中ぐらいの木、ちっちゃい木、表土、ま、おっきい木はちょっとお金がかかるので切株になっちゃったりするんですけども、そういう形でみんな利用してます。やっぱり表土が一番大事で、木をいくら持ってくるよりも表土を保存しといて

その後使うっていうのが一番効果的です。

虫なんか一杯トンパックの中から帰って来たりしてます。あとドングリなんかも育ってます。はい。

コナラの場所皆さんからよく聞かれるのでちょっと。里山遊歩ゾーンの所ですね。直接持ってくると近いんですけども途中にホトケ沢があるので、もうグーッと回して持って来ってます。それがその間にある古窯のところ。

ここが生えてた所です。今休憩施設がある所なんですけど、ここから直線距離で200メートルぐらいなんですけれども、この間はいろいろ問題が起こりましたホトケ沢、政府館移転の原因になった所なんですけど、どうしても触らない、触れない、ホトケドジョウを守りたいということで、仮設道路も出来ないんで、ずっと愛工大の中を歩いて国道へ出て深夜ずっと。次どうぞ。

山根

コナラの移植のために深夜に大型トレーラーで移動したんですが、あまりにも大きな木であるため、一箇所、直角に曲がらねばならない場所があり、そこを通過できなければ移植を断念することになってましたね。

柳澤

1個戻していただけますか。今の話なんですけど、これはえらいことに皆右曲がりなんです。で、これはトラックのオペレーターさんが気付いてくれて、だったら木を少し右に傾けて載せておけば右回りの時にすごく楽じゃないかと。要はトラックよりも何メートルも後ろはみ出しちゃう。

ですから斜めに積んでおけば大丈夫だろうと。それはすごくうまく行かして、心配してた角という角は全部曲がれたんですが、一つ問題がありまして、この155号が緩い左カーブなんです。

そうすると尻尾が反対車線に飛び出るような形にずっとなってしまうんです。それを4人がかりで位でこう押えるんですが、すぐ裏を20トントラックとかがビュンビュン通っていく。相当怖かったです。

これは今博覧会協会の儀典の方に行かれてますけれども県の当時推進局にいらした杉浦さんと一緒に押え付けてたんですけども、この交差点まで来たときには本当にほっとしました。はい、すみません、次お願いします。

で、これは工事中の保護状況で、大竹先生、今日いらっしゃってると思うんですけども、ちょっと暑いからムシロをかけると言われてればすぐかけて、雨がかけるとだめと言われてればすぐブルーシートに替えて、いろいろな対応をして来ました。

現場では「コナラ様」と呼ばれてたんですけど。ただ実際ですね、これがどういう写真かといいますと最初にコナラをここに持って来たときの写真なんです。

で、通常建物を建てる時は柱を最初に立てた時に立柱式というちょっと神事をやるんです。それを今回はこのコナラを持って来た時にお酒をちょっとかけて立柱式をやりました。ですから本当に現場の中ではちょっと神様の存在だったということなのかなと思います。

他にもいろいろはやったんですけどやっぱり象徴的な存在で職人さんなんかはすごくこれを守るためにどうしたらいいかっていう意識を植えられた意味では良かったかなと思ってます。はい、次。

これはその年の夏葉っぱが出たんですが、まだこの頃根っこは出てないです。非常に不安定な時期ですね。まだこれは屋根がかかってないからいいんですが、そのうち段々こうなって来て、もう、温室の中で作業しているような状況です。

それから木のリースの話もちょっとご紹介しておきたいんですが、ここの県館の仮設の部分で使っている木材は全部下山村、今は豊田市ですが、で採れた木を使っております。スギとヒノキです。これを愛知県館のほうで今使っておりますが、会期が終わったら下山村のほうへ持って帰ると。採れた木のそばで作っている小学校で再利用するという話は決まっております。

先ほど林野庁の長官さんがいろいろ木を使え木を使えという話があったんですが、実際我々設計者からすると日本の木は高くて使えないんです。で、高くてもいいから買ってねというのがさっきの長官の話になっていく訳ですが、設計者としてはそんなことはやっぱり中々難しいんです。外材の方がどうしても安い。そんな中でこれは下山村と愛知県館で折半するような形を採れちゃったんです。ですから通常よりも費用を安く買えた。

もう一つは産地直送なんです。途中で商社を通さないで、むこうの森林組合とこちらとでやっちゃったんです。ですから通常の値段よりすごい安い値段ですごくいい木を買えたんですね。

この中がちょっと赤い部分、これスギですけども「赤太」、周りを「白太」って言うんですね。この赤味が多い所はいい木ということになります。この辺皆赤い部分が多いです。じゃあ、次。

あと環境という言葉が出てきましたけれども、周辺住民環境というのもやはり環境ということで、ゴミ対策なんかをいろいろやりました。はい。

あとこれは会期が始まる前のアテンダントさんたちの勉強状況なんですが、一生懸命勉強してくださって来てくれるお客さんにいろんな説明をしてくださってます。本当に「海上の森」で起こった本当に一部だとは思いますが、来てくださってるお客さんに対してシアターの映像以外にも説明を下さってます。

やっぱり後に残るものということでは、彼女たちスタッフ、あるいは来てくれたお客さんというのも一つの財産になっていくんじゃないかと期待しております。はい。

これは、工事中の上空写真なんですが、今、ムササビさんがいろいろ飛び交ってまして、なぜ壁に穴を開けたのかという話は、実は愛知県館に来てほしいから空けた訳ではなくてですね、工事現場の途中でこのクレーン、足場を使ってムササビがこういうルートで飛び始めたんですね。今まではこういうUの字型だったんです。これは平成15年度のアセスで出ております。平成16年度になると工事現場のここを飛び始めたのでこのルートを壊さないようにということで両側の外壁に穴を開けてムササビが通っていけるようにということで設計をしたものです。

ですからアセス、先ほどから話出てますけれども、すごく立派なアセスと言われてますが、実際に読んで見るとですね、沢山の項目すべて、数値目標があればまだいいほうで、ほとんどが極力努力しますとか配慮しますとかそういう言葉で終わってるんです。

で、我々工事関係者、設計者は、じゃあそれをどうしようっていうのを全部こっちが考えないといけないんです。その数値目標、具体的な内容もない中でやっていかなきゃいけない。

特に生物系のデータ、はっきりとこちらまで降りて来ないんです。ですからその辺を配慮するためには今度生物を学ばないといけないということになってきて、気がついたら建築をやっているんじゃないかってどうも生物屋っぽく最近はなって来ちゃったというのはあります。今も毎日来てくれて

ますので是非感じていただければと思ってます。すみません長くなっちゃって。

山根

あと10分しかありません。皆さん、万博計画が始まって以来の7、8年分のもの積もりに積もった話がありますから、とても時間が足りません。そこで最後に皆さんから、この「海上の森」を「今後、こうしよう」ではなく、「海上の森」を考えるために「誰が何をすべきか」を、お一人2分半ずつお願いします。

木村

はい、それじゃ、モリゾーから。

今日のね、タイトルを見ていただくとね、これとっても不満だったんです。「愛知万博の成果を海上の森の未来へ」。「愛知万博の成果を」っていきなり書くなよと僕は思ったんですね。

海上の森の議論を愛知万博の成果にどう繋げたかっていうことをやっぱりきちんと検証しなきゃいけない。そこんとこすっぽり落ちてるから僕が冒頭申し上げましたように、今やってるのは本当に環境万博なんですかって話になっていくんだと。

その検証をきちっと時間かけてやりましょう。その上でそれを海上の森の未来へ繋げていくために、私どもは海上の森の会というものを作りました。

この会は、先ほどからですね、愛知万博検討会議のあたりで賛成派だ反対派だとか言ってね、古南さんは反対派の旗頭と言われてるけども本当はそうじゃなくて、よりよい万博にするためにどうすりゃいいかっていうことを彼は一生懸命言ってた訳です。

僕は、今はご隠居みたいな顔をしていますけれども、本業は学者のつもりですから、科学的に博覧会を考えたいと思って来たし、そういう立場で愛知万博検討会議に参加したら、僕の前前の看板にですね、博覧会推進瀬戸地区協議会の代表だと書いてある訳ですよ。びっくりして、ああ、今日から僕は賛成派なんだと。それなら今日からそういう発言をしようかなと思ったけど。

隣に大反対の某瀬戸市議が座っておりまして、で、でもね、僕が一番仲良くなったのはその彼なんです。博覧会協会の人がいるんな説明する度に、「違うよ、な、な、な。」とか僕と一緒に言っていたのは彼ですから、賛成派も反対派もあそこでは実はなかったんです。

何が本当で何が嘘で、どうすりゃ本当に博覧会が出来るのかあるいは出来ないのかっていうことを皆で議論していたという意味では皆が賛成派で皆が反対派だった訳です。

で、その頃の議論をやっぱり思い起こしますとね、海上の森の所にやっぱり戻らざるを得ないんです。

つまり私たちは、博覧会をどうしようというふう考えた訳ではなくて、今私たちが立っている場所をどうすれば皆仲良くやれるのか、どうすればやりたいことがやれるのかということを生懸命考えてきたと思うんです。そういう意味でも皆賛成派で反対派だった訳です。

で、これからの話になりますけれども、私たちやっぱりこの十数年、いろんな意味で、自然保護を叫ぶ人たちっていうのは本当にこれほど多様かと思うぐらいに多様なんです。そういう人たちが皆寄り集まると、多分自然保護なんて成り立たないぐらいに大喧嘩が始まる訳で、しかし、しかしこの十数年かけてね、そういう人たちが寄り集まってもつかみ合いの喧嘩が起こらないシステム

だけは段々出来上がってきた。これは皆さんの学習の成果だと思う。

で、そういう人たちを皆集めて海上の森の会を作りたいんですけどまだまだ寄り付きにくい。海上の森の会なんてどうせ県がでっち上げた組織だろうとか、ご隠居の木村がやってんのか、いろんな意見がある訳で、中々寄り集まりにくいと思うけども、それを超えてですね、もう少しいろんな人が集まれるような呼びかけを私たちはやらなければならないだろうなと思っています。

これは決してそんなに難しくないんですね。海上の森へ皆さんが足を運べばいい。今日のシンポジウムはどうせ時間切れで終わっちゃうだろうと思いますけれども、11月ぐらいにですね、海上の森の会として、僕はやっぱり愛知万博を検証してこれからの海上を考えるというシンポジウムやりたいと思います。是非みなさんお越しいただきたいと思う。(実際には12月11日に開催されました。)で、案内くれよと言われても困るので一つだけ言います。海上の森の会にお入りください。以上です。

山根

今何人いらっしゃるんですか？

木村

今250人。びっくりしますね。去年の12月に始めたときに130人ぐらいだったんじゃないですかね。そんなに多く広報してませんが、あれよあれよという間に250人を超えました。

山根

愛知県外の方はどれぐらい。

木村

県外の方はどうだろう、5%ぐらい。

柳澤

私も同じようなことというより、今日は絶対時間が足りないと思ってましたので、このあともしかしたら下のほうで少し延長ができるかもしれないということと、今後もこういったシンポジウム、もっと皆さんからも意見を聴きながらディスカッションできるようなシンポジウムを是非続けてやっていきたいなとは思っておりました。

山根

正直これだけたくさんの方がね、来て下さると思わなかったんですけど、例えばまたやりますと言ったら、皆さん来ていただけますかね。(客席・拍手)

山根

68%ぐらいの賛成です。では、古南さん。

古南

そうですね。先ほどの柳澤さんの話は、私は、これこそ博覧会協会から説明してほしいなとなつてということなんですけど、一つはやっぱり、あれだけのね、努力があったのをもっと宣伝すればよかったなと思うんです。

で、一つは誰が何をやってるかっていう情報をね、皆が共有してく、これだけ広い森ですから、それは、一つ大事なことです。

それから、やっぱりすごく大事なものは、人だと思うんです。

先ほどマリさんはコミュニティーっておっしゃいましたけれども、海上の森の会の設立総会に私出て非常に感激したのは、里山を守れていう運動をしている実際に汗かいて木を伐ったりとかつていうことをやっている団体は、日本全国一杯ありますけど、あんなに、何ていうかなあ、地の人、旧住民という言い方もありますけど、が中心になってイニシアチブ握ってる会というのは本当見たことないです。ものすごい瀬戸のパワーを感じました。

で、あ、こんなにすごい人たちがいたのかって初めて分かんたんですけど、私たちの立場はやっぱり海上の森の会みたいな人の輪をね、外側からいろいろな形で応援していくのが一つ義務かなと思ってます。私はあんまり感激したんで個人的にも会員になってしまいましたけれど、個人的なものを超えて、一つ日本の宝世界の宝っていう話がありましたけれど、海上の森を支えていくコミュニティーですね、それが持続していくように応援して行きたい。今日は役所の方も一杯来られてますけど、役所の人たちにもその枠組みを大事にしてほしい。市民とお役所は、気持ちは同じだったとしてもどこか違いますが、そこを超えながら。

これだけつらい目にあつて来た訳ですから絶対超えられると思いますので、人の輪で海上の森の成果を全国、世界に発信していくことが大切だと思います。

山根

マリさん。こうやって今、いっしょにテーブルを並べて話すことができているのに、なぜ、これまで長い間、お互いを避けたり問題を先延ばしにして来たんだと思いますか？ 世界で起こっている戦争と共通するものがあるのではという気がするんですが？

マリ

そうですね。戦争の始まりってそういうことから始まりますので、私は先ほど木村さんからお話が出ましたように、瀬戸会場は盆栽から戦争まで幅広い内容で、やっぱり戦争っていうのは一番大きな環境破壊である訳ですから、やはりその、多様な人々、多様な考え方、多様な生物、先程も話にありましたけど、これをどうやってお互いコミュニケーションしあつてうまくやっていけるか、でも無理に仲良くなる必要ないと思うんですね、私は。仲良くなれないことってある訳ですから。だけどうまくやってくつていうことがすごく重要なので。

今回私は万博に関らせていただいて、すごくうれしかったことが一つあったのは、ここの海上の森にドングリがあるんですね。モンゴリナドングリっていう、一つのナラの種類なんですけど、モンゴリドングリっていうニックネームでかわいいんですけど、それを今回、木を伐るとのことの中

で3ヶ所会場の外にその倍の分植えましょうということで植えてきたんですね。恐らくここにいらっしゃってる方の中に富士山の時の植林の時行かれた方もいらっしゃるし、あと瀬戸会場、瀬戸の周辺にも植えました。あとモンゴルまで行ったんです。私もその時一緒しました。

今日会場の中に一緒にモンゴル行かれた方もいらっしゃいますが、そこで、モンゴルのドングリをモンゴルに持って帰りましょうっていうことで、そこで植林しようと思ったら、生態系が変わっちゃうので困りますと。モンゴルにはモンゴリナラってないんですって言われまして。ですから松の木を向こうで植えてきて、3000本植えてきたんですけども、そういう形で海上の森はもう世界と繋がってるんですね。

ですから、私はそういう意味で、これから海上の森がやっていかなければいけないことっていうのは、皆様がやって来られたこのひとつのベストプラクティス方法じゃないでしょうか。

このコミュニティー作りっていうか議論のし合い方とか、どういうふうにして最後にこうやって纏まって来たかってことは、すごく大事に、継承して行かなければいけないことですので、私は是非これをもうスターティングラインと言いますが、これからっていう形で、自分たちの地域だけが森がこうされた時に、自分たちが立ち上がってではなくて、いろんな地域に沢山の自然で、もちろん大事にして本当に触ってはいけない森もあれば、上手にそれを人間として活用して行かなければいけないもの、いろんな形があるので、そういうものをちゃんと専門家と話し合ったり、または、専門家だけでは分からない所もあるので、いろんな形でも専門家それに関するステークホルダーと一緒に交流を持ちながらやっていくことが、私はこれから海上の森ができることではないかなと思うんですね。

山根

「海上の森」の問題はコミュニケーションの不足でこじれたのかもしれませんが。つまり、この「海上の森」そのものを見ないでディスカッションしてきたんじゃないでしょうか。議論の前に、まず皆で森行ってみようということが大事です。瀬戸愛知県館の出展の精神や計画は、何度も何度も森を歩くうちに森からエネルギーを得て、いつの間にかこうなったんです。そしてついには、館内に移植したコナラの木に毎晩ムササビがやって来くるまでになった。一昨日の夜には、ムササビが私たちの目の前で飛んでみせました。そんなことが同時進行しているのが、このパビリオンなんです。

さて、「海上の森」をどうしていくのかの議論がここで終わっては尻切れです。木村さんがおっしゃったように、私は会期が終わったら東京へ安心して帰るしかないので、私の猶予期間の9月25日までにもう一度、こう機会を持てたらと思いますが、いかがでしょうか？

愛知県森林保全課

今後も引き続き開催したいと思いますので、皆さんよろしくお願いします。(会場・拍手)

山根

大変せわしくて恐縮です。この「森の劇場」での次の上映を待っているお客様がいらっしゃるため、時間延長ができないんです。今日は、猛暑の会場にお集まりいただき、ありがとうございました。パネラーの皆さん、ありがとうございました。(完)